

京鹿子

平成二十七年十一月一日発行
通巻一〇九五号(毎月一回)日発行



11月号

鈴 鹿 呂 仁

拾 掬 集 其 の 二

風 わ た る 橋 よ り 崩 る 嵯 峨 晩 夏

露 草 の 露 の 一 つ は 辻 地 蔵

あ き つ 群 れ 遠 嶺 の 雲 の 嵯 峨 遊 び

ひ と 草 も わ れ も ま た 秋 ゆ れ る か ら

水 澄 み て 濁 音 を 消 す 里 の 風

指 先 の 風 に 恋 し て 風 の 盆





— 近 詠 —

鈴 鹿 仁

寒 露

毛 繕 ふ 猫 の 一 心 寒 露 の 日

主 な き 机 上 の ひ か り す す る 寒

萩 満 ち て 昨 日 の 如 し 野 風 呂 の 句

— 追 懐 — (その十五)

柿 熟 れ て こ れ か ら 先 の 二 卵 性 〔平成八年作〕

ど ん ぐ り の 弾 と 響 か せ 鳥 散 ら す 〔平成十年作〕



— 近 詠 —

和田 照海

西瓜舟

蟹の穴つぶして潮の満ちて来し
さし潮に前島よりの西瓜舟
海峡を抜けて面舵雲の峰
庫裏訪へば壇の蝮の立ち上がる
その後も都の峰の蟬しぐれ

悼む 都峰主宰

秀華採集

追惜の胸蒼むまで露の宿

高槻 安田 優歌

亡くなられた方を悼む心は、人それぞれに形が違ふもの。时期的に都峰先生に思いが行きつくのは、私だけであろうか。旅先で訃報を耳にした作者の抑え切れない動揺を鎮める長い時間が「胸蒼むまで」の措辞に充分言い尽くされている。

電柱の影の通りに立つ炎昼

荒尾 野口 宗久

炎昼に熱り立つ影は、やがてその影を失うほどの酷暑となる。揺らぎながら立つ電柱。そして影も揺らいでいる。その原因は、炎昼の筈ではあるが「炎昼が影の通りに立っている」という逆転の発想が奇抜。炎昼は、影が消えていくことを知っているのだろうか。

桐一葉百ものがたり忽と果て

京田 辺山 中 志津子

「桐一葉落ちて天下の秋を知る」と言われるように桐の木が、葉を落とす様には風雅を感じさせられる。一枚一枚の葉のもつ命を人それぞれの生き様と重ね合わせ「百のものがたり」と見立て、命の終焉が、「忽と果て」るのも一葉らしく結んでいる。



神麓集

いぼむしり

藤岡 紫水

夕風に誘はれ落つる花木
彩尽くし風に細身の唐辛子
五山の火消え果て星座整ひぬ
美しき嘘は見え見え星月夜
今生の眼も枯れていぼむしり

光 芒

松本 鷹根

鬼灯の彩をこぼして露地点す
暮れる湖鷺の孤立の秋めけり
湖眩し新米入荷の道の駅
恋の歌碑みんなみん蟬に邪心なし
神籬に射す光芒や露の朝

松田 都青

句集めくればこの世の声を想ひ出す
流燈の消えては浮ぶ浮世なる
夏の音消えず深夜に落つる声
叡「故豊田郡峰氏追悼句
山の小道」の小道を登る一生なり
一蔵故鈴鹿けい子氏追悼忌の堪えて落下を恥とする

追 信

北川 孝子

桐一葉師のたましひの遠去かる
遠き世へ追信のごと桐一葉
夏日濃し一進もまた一退も
真炎天来し方の道一途なり
歩むたび影を濃くして秋立てり

扇 子

丸井 巴水

扇子絵の雀飛び立つほどあふり
彷徨ひし蛇は無傷のまま秋へ
仏像の金ばく汗のごと残り
雄瀧より雌滝になじみ忍び籠む
一拍で龍を鳴かせて寺すずし

添水 晴

塩貝 朱千

花蕎麦のあふれ咲く野に驢馬つなぐ
天へ翔つ破れ蝶大き翅づかひ
添水晴額づきて師に問ひかくる
水音に迷ひなく白芙蓉咲く
秋高し首まで漬かりさうな甕



京鹿子集

鈴鹿呂仁選

追惜の胸蒼むまで露の宿

高 槻 安田優歌

鷺草の山城平野の風に乗る

走馬灯うたごゑ突然挽歌となる

星まつり切絵の舟に灯がともる

クレマチス宙に哀慕の腕のぼす

花仙人掌砂漠の長老聞き上手

アリゾナ 伊吹 之博

縛羅きらと愛ましきいのちよ七夕星

打ち水のもてなす心下駄の音

電柱の影の通りに立つ炎昼

荒 尾 野口 宗久

風物詩また思ひ出す冷奴

打ち水の投網のごとくなりにけり

百日紅母の声まだ衰へず

白服の裾翻し逝かれけり

夕風ぎて外灯ひつそりお向ひさん

オハイオ 水谷 直子

サングラス一寸気分の盛り上がる

紐をとき夕風の道犬の散歩

桐一葉百ものがたり忽と果て

京 田 辺 山中志津子

窓わくは大きな額ぶち夕風の絵

金魚池の囲む秀長城下町

夕風や車一台通り過ぐ

ちちははに見守られぬし夏座敷

札 幌 野村 鞆枝

お陽様がだいたい色に原爆忌

二匹ともポニヨと名付けし金魚かな

なにもかも許されさうな大西日

何となく只二人居る夏座敷

酒 田 藤波 松山

今何をするこもなし花木種

その何かわかれば軽しほとけのざ

生偶然死は必然や水すまし

師を偲び友をも偲ぶ夏盛り

洪 川 東 秋茄子

吟行の指導を忘れじ夏も去る

初盆の準備に追はれ気もまぎれ

わが耳をうたがふ訃報猛暑の日

銚建ての縄を締めたるにはか雨

さいたま 神田 惣介

幼少の思ひ出鮮やか銚巡行

雨風を侵して堂々銚巡行

国会の安保法論議梅雨長し

萱門の一步でくぐる梅雨の偲

千 葉 伊藤 希眸

欲しいもの無し枇杷の種手に三つ

蟬の穴再びといふ道は無く

炎天をどこまでいけば許される

直江 裕子

羅をまとひて未だ生きたりぬ

見はるかす老いの愉しみ大花野

炎天の死角尾のあるもの動く

原爆忌午前三時を覚めてをり

潮時を僅かに語る夏衣

風道や葉つばの隠す山ぶどう

祭髪白きピアスの香りけり

夏空の青折り返す速さかな

帰省バス東京バナナも棚にゆれ

遠花火靄の辺りは浅草か

麻の蚊帳まづ二張りを断捨離す

ひつそりと八重の十葉シヨパン弾く

初蟬にパトカーの音重ね過ぐ

端居して俳句生まるる時を待つ

つむじ風街を浚ひて炎暑かな

空蟬や足のふんばり濡れてゐる

余花ぼつと薄き色なり夜明け前

青空の青をいたたくかき氷

父母と夫まで添うて茄子の馬

魂離る方へ挨拶百日紅

行く先は逆算でよみ凌霄花

きちやうめんな水母居るらし夕間暮

彼の世よりすがたあらはす夏の蝶

高野 春子

布川 孝子

松 戸 岡山 敦子

習志野 上野 紫泉

船 橋 元橋 孝之

大百足訳の解らぬまま討たる

金子 正道

肉まんの臍の不揃ひ日雷

句意さぐる夜は白々と蟬の声
巨星慕ふ銀河鉄道言葉なく

ランドセル背負ひしままの冷蔵庫

ラツセラー佞武多明りに跳る声

空蟬や嫁がせし娘の置手紙

盆灯籠飲み合ふ友も影ばかり

西瓜のタネ飛ばす縁側母も居て

東 京 野中 圭子

新豆腐苦さ一途さ瑞々し

暑に籠り絵の練習も父ゆづり

振り返る更に淋しき原爆忌

猛暑日に出かけ気になる事済ます

大祓杜の鴉のしづまりぬ

黒い羽根拾ひ盆僧明日来たる

形代にわが身うつせり甘き水

紙魚のあと辿り読みする手沢本

丹羽 武正

梅雨晴れやイルカの描く放物線
きうり茄子旅のめだまの詰め放題

紫陽花の真花にしばし目を凝らす

古希前の肌の恥ぢらひ簾闇

夏真昼スーツ片手に就活す

児玉 有希

句会終へ喉越しのよき生ビール

梅雨しとど腰痛癒える有馬の温泉

雨しとど女王花の蕊現るる

岸上 道也

夏草を刈り残したる襦宜の庭

強風に消されし言葉酔芙蓉

梧桐の夕べ溶けゆくコンサート

朝顔や種子は下剤になるといふ

福島 照子

朝顔の萎えて真昼の犬の舌

てにをはの成らぬ枕の明易し

海鞘食つて二百湮の波頭

拭きなほす眼鏡敗戦日のコラム

マンホールの蓋にも文化水を撒く

揚げ花火つぎ待つ闇の深さかな

狛犬の眼の炯けいと七変化

大津絵の鬼も汗して鉦を打つ

紫陽花や朝を開く母の窓

気塞ぎや光芒放つ雲の峰

空うなり山崩れきて大暑かな

中西 明子

炎天を肩で押しゆく影法師

朝まだき蟬のつぶやき始まりぬ

夕焼に軟禁されてゐるふたり
いつの間に忘れし初心竹煮革

中島悠美子

神田美千留

中村 三郎